

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## LINE Use of Children of a Double-Income Family : Examples and Follow-up Interviews

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮寄, 由美 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002553">https://doi.org/10.15084/00002553</a>

# 共働き家庭の児童のLINE<sup>1</sup>使用 - 実例とフォローアップインタビューから -

宮寄 由美 (明治大学総合数理学部)

## LINE Use of Children of a Double-Income Family - Examples and Follow-up Interviews -

Yumi Miyazaki (Meiji University School of Interdisciplinary Mathematics)

### 要旨

本稿では、筆者が現在構築中の『M-ZAK LINE データベース』に収録されている小学1年生、小学4年生の兄弟とその母親とのLINEデータをもとに、LINEにおける小学生の言語活動と、その内容を分析する。分析にあたっては、児童の生活環境を詳しく聞き取り、LINEが利用される背景とともに、決して希薄化するばかりではない現代のコミュニケーションの側面を、長男、次男、そして母親の「感情の表出」と捉えられる場面を中心に考察を行った。

### 1. はじめに

本稿は、東京都東部のタワーマンションで暮らす共働き家庭の母親と長男（10歳：小学4年生）、母親と次男（7歳：小学1年生）のトーク履歴から、児童の言語生活とそれともなう言語活動の一端を観察するものである。

筆者は2016年4月から2019年7月現在までLINEデータの収集を継続し、現在『M-ZAK LINE データベース』として、整備を継続している。2010年代、言語生活のかなりの部分を占めるLINEというメディアは、基本的な言語活動である話す・聞く・書く（打つ）・読む、という機能を網羅する。筆者の収集の主な目的は、このメディアを通じた待遇表現を探ることにあるが、相手との通信手段の多様化が今まで以上の早さで進む現在、LINEにおける人々の日常のコミュニケーション履歴は、言語資源としても大変に貴重なものとなるであろう。

本稿では、データ参加者である小学生児童にとり、LINEが日常においてどのような役割を果たしているのかを分析する。

### 2. 先行研究と本稿の視座

#### 2.1 『M-ZAK LINE データベース』の概要と本稿のデータ

本稿で使用するデータは『M-ZAK LINE データベース』（以下、本LINEデータベース）は2019年1月時点、データ提供者と協力者は、延べ198名、約38,000行、7、10歳男児～10代、20代、30代、40代、50代、60代男女のデータが収納されたデータベース<sup>2</sup>の一部である。2019年7月現在も、データ収集と整備を行っている。

そのうち本稿では、40代母親とその子供（7歳児、10歳児）とのそれぞれとのトークルームにおけるやり取りのうち、データ提供者の母親から承諾を得て提供された部分の分析

<sup>1</sup> 「LINE」は株式会社LINEの商標、または登録商標です。

<sup>2</sup> 本LINEデータベースの設計と加工方針の詳細については、宮寄（2018, 2019）を参照されたい。  
miyazakiyumi@gmail.com

を行う。

総務省による『平成 29 年度版 情報通信白書』によると、2016 年時点で 13 歳（中学生）から 19 歳の 81.4%がスマートフォンを個人保有しており、79%が LINE を利用しているという。これは 40 代の同調査項目の利用率よりも高い。

本稿で扱うデータは、上述の総務省の調査対象外であった小学生によるものであるが、2011 年から急激に普及し始めたスマートフォンと、それに伴って急増した LINE の利用率を考えると、2019 年現在の小学生のスマートフォンと LINE 利用も低年齢化が進んでいる事が予想され、少数ではあるが、その実例を分析すること、また、言語資源として保存しておくことには一定の意味があると考えられる。

児童に関する言語生活・言語行為の研究には、家庭環境とカウンセリング、発達障害、学習障害など何等かの困難をかかえた児童の言語活動やそれに伴う生活の質の向上を目指すものが多い。本稿で扱う児童のデータは、両親、児童ともに、そのような困難を抱えているという認識はない。当該児童と母親が、日常の中にある喜びや悲しみとともに、どのような言語活動によって、どのようにコミュニケーションをはかっているのかを観察していく。

## 2.2 分析の手順

本稿では、2 名児童が 2018 年 9 月 30 日に LINE の利用を開始した時点から、母親との送受信履歴のうち、長男とは 2019 年 2 月 2 日までの 1614 行<sup>3</sup>、次男は 2019 年 5 月 1 日までの 215 行の、任意の提供部分を分析対象とする。

当該小学生児童の言語生活、または言語活動における LINE の役割について以下の視点で観察する。

- ①当該児童がどのような家庭環境のもと、生活しているか。
- ②それぞれの児童がどの時間帯に LINE を多く使用しているか。
- ③特に突出して使用される時間帯は、どのような生活的背景があるのか。
- ④LINE は、文字メッセージの送受信の他に、通話、テレビ電話などのメディアを有している。特に③の時間帯にどのようなメディアを使用し、どのような言語活動がなされているか、実際のデータを元に考察する。
- ⑤母親へのフォローアップインタビュー（③、④の分析内容を中心に）

母親へのフォローアップインタビューは、当該データを分析した後、質問項目を整理し、2019 年 7 月に筆者が母親に電話によって行った。答えたくない場合は答えなくて良い旨を説明した後行ったインタビューの所用時間は 50 分程度であった。上記①～④のうち、特に③④に関連する項目の確認が中心となった。

## 2.3 データ提供者の属性

【フェイスシート】（2019 年 2 月時点）

### A. データ提供者自身

管理 ID : Rf008 女性 46 歳

主婦・会社員（広告関係営業）・Lm041, Lm042 の母親

<sup>3</sup> 本データベースでは同吹き出し内でも改行をもって 1 行とし、データも改行毎に 1 セルに入力されている。通話や不在着信、音声データ、スタンプ、空白行なども 1 度の使用につき 1 行とカウントされる。

## B. LINE データ参加者

《データ属性：FM4 1 0 0 1》

管理 ID：Lm041 男児 10 歳 小学 4 年生（公立）・Rf008 の長男

携帯電話（スマートフォン）の所有開始時期：2018 年 9 月

登録中の“友だち”<sup>4</sup>：家族，小学 5 年生男児 1 名，中学 1 年生男子 1 名（親の許可有）

《データ属性：FM4 0 0 0 1》

管理 ID：Lm042 男児 7 歳 小学 1 年生（公立）・Rf008 の次男

携帯電話（スマートフォン）の所有開始時期：2018 年 9 月

登録中の“友だち”：家族のみ

### 【属性に付与された記号・データ提供者と参加者】

データ参加者に示した《データ属性》とは、いわゆるトークルームの管理番号を指す。1 桁目が「R」である場合は“データ提供者”<sup>5</sup>を示し、「L」はデータ提供者に LINE を送信した“データ参加者”を示す。2 桁目は、データ「提供者」の性別が男性の場合は「M」、女性には「F」を付与<sup>6</sup>。次にデータ「参加者」の性別を示す。

今回は母親から提供された兄弟それぞれとの 2 者間の LINE であるため、40 代女性と 10 歳男児のトーク履歴には《FM4 1 0 0 1》のデータ属性が、40 代女性と 7 歳男児（10 歳未満）間のトーク履歴には《FM4 0 0 0 1》のデータ属性が付与されている。

40 代母親（データ提供者）のメッセージは、常にトークルーム画像の右側の吹き出しに示され（管理 ID：Rf008）、10 歳児（管理 ID：Lm041）、7 歳児（管理 ID：Lm042）から受信したメッセージは常にトークルーム画像の左側に提示されている。

### 【児童のスマートフォン所持のきっかけ】

両親が共働きであるため、学校の授業が終わった後の連絡には、長男が必要に応じて児童の通う小学校内に設置の公衆電話が使用されていた。スマートフォンは、その公衆電話の撤去に伴い、両親が買い与えたとのことである。つまり、両児童ともに、スマートフォン以前にいわゆるガラケーと言われるような携帯電話を個人所有することはなかった。

また、学内へのスマートフォン持ち込みは許可制となっており、両児童ともに端末を持参し通学している。

両児童のスマートフォンは、「LINE モバイル」と言われる、株式会社 LINE の提供する端末を使用しており、初期設定で LINE のアプリケーションが利用できるようになっている。

## 2.4 当該児童の家庭環境と LINE 使用

本稿で対象とするデータを送信した児童は、東京都内在住であり、両親ともに働く 4 人家族の長男と次男である。当該家族の平日のおおまかなタイムスケジュールは下記の通りである。

<sup>4</sup> LINE は“ともだち”申請を行い、了承を得た相手とのみ通信が行える。

<sup>5</sup> 「データ提供者」とは、筆者に直接データを提供していただいた調査協力者を指し、「データ参加者」とは、データ提供者が LINE でやりとりを行った相手を指す。データ提供に際し、「データ参加者」には、データ提供者から研究の主旨説明等を行い、提供許諾と情報開示範囲の確認を取っていただいた。

<sup>6</sup> 性別、年齢、職業については、公開を希望しない場合もあり、その場合は X が付与される。

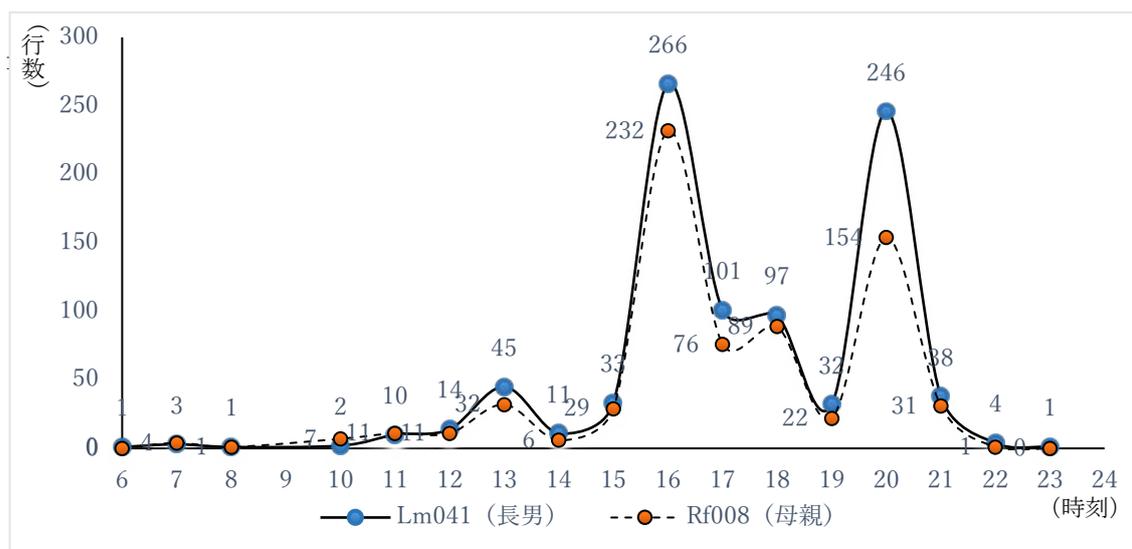
表1 当該家庭のタイムスケジュール（平日）

	スクールバス	始業	下校（スクールバス）	塾／学童保育	退社
父親		9:00			20:00～ 24:00 過ぎ
母親（Rf008）		9:30			20:00～ 21:00
長男（Lm041）	7:20	8:30	15:50	A 塾～19:00 B 塾～20:00	
次男（Lm042）	7:20	8:30	14:50	学童保育 ～17:00	

### 3. 児童の小学校以外の活動とLINE 送信時刻

#### 3.1 10歳児童（管理ID：Lm041）と母親の送信時間

グラフ1は、表1で示したタイムスケジュールで平日を過ごす10歳児童（管理ID：Lm041、以下、長男）と母親のトークルーム内でのそれぞれの送信行数<sup>7</sup>である。



グラフ1：長男(Lm041)と母親(Rf008)のLINE 送信行数と時刻

長男の場合、16:00頃スクールバスでの下校後一旦帰宅する。その後塾までは自宅最寄りの駅から電車で1駅のところにある塾に通っているが、週に2日はA塾に19:00まで通い、別曜日にはB塾で20:00まで過ごす。A塾へは小学校1年生の頃から通っている。

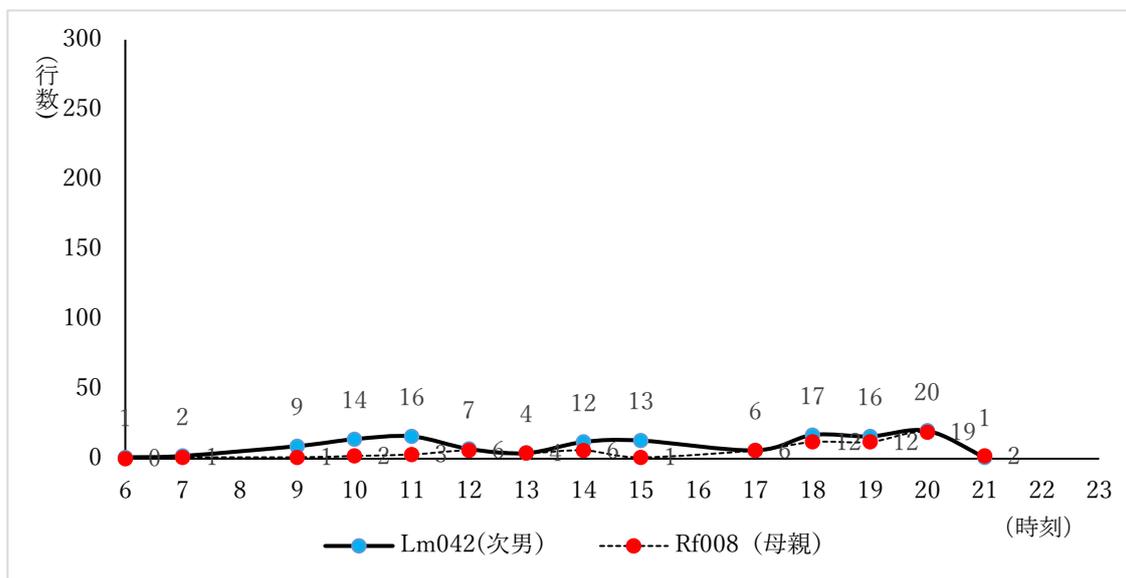
塾以外の日は、スクールバスで下校し、児童の住む同マンション内の同階に住む祖母の家にて、弟である7歳児童（管理ID：Lm042）と夕飯まで過ごすという。

送信時間は、下校時から塾へ向かうまでの間にあたる16時台と、塾から帰宅する20時台が突出して多くなっている。その他の時間帯の送信曜日のはほとんどは休日のものであった。当時長男は土日も少年野球チームの練習にあてており、その外出先からの連絡も行っている。

<sup>7</sup> 本送信「行」数は、休日も含む。

### 3.2 7歳児童(管理ID:Lm042)と母親の送信時間

グラフ2は、表1で示したタイムスケジュールで平日を過ごす7歳児童(管理ID:Lm042, 以下、次男)と母親のトークルーム内でのそれぞれの送信行数である。



グラフ2：次男(Lm042)と母親(Rf008)のLINE送信行数と時刻

次男の場合、下校後すぐスクールバスで学童保育施設に向かい17:00まで過ごす。長男同様、小学校1年生時にA塾に通い始めたが、自らの希望で通うのを辞め、データ提供時期にも特に習い事はしていない。

学童保育施設で17:00まで過ごした後は、児童の住む同マンション内の同階に住む祖母の家にて夕飯まで過ごす。

次男の場合、全体にLINEの利用頻度が兄に比べ低く、突出した傾向はみられない。また18時以前の送信履歴は、ほぼ休日のものである。

## 4. メディアの選択状況と言語活動

前述の通り、LINEは、文字メッセージの送受信の他に、通話、テレビ電話などのメディア機能も有している。これらは、「話す」、「書く(打つ)」、「読む」、「聞く」、の4つの言語活動を網羅する。以下に、長男、次男それぞれのメディア選択の内訳を示す。

### 4.1 長男(Lm041)の場合

#### 4.1.1 長男の言語活動と内容(2018年9月30日~2019年2月2日)

送信当時小学4年生であった長男の送信履歴は、グラフ1から、主に16時台と18時台に集中している。

その約80%が文字列による入力であった。次に多く選択されたスタンプも8%入力されているが、いずれも文字列が付与されていないスタンプである。

長男のメディア選択パターンとして、スマートフォン端末所持の初期は「話す(通話)」事が最優先され、通話が繋がらない「不在着信」を経て「打つ(書く)」の送信、という特徴がみられた。「通話」が可能であった場合も、そのほとんどが30秒以内である。

平日仕事を持つ母とは即時に通話できない事が多く、端末所有後間もなく「打つ(書く)」

行為が最優先されるようになる。

文字メッセージによる送信内容に含まれる語彙は、大きく分けて次の4つに分けられる。

表2 長男によるメディア選択

	行	%
文字列	735	81.0
スタンプ	73	8.0
不在着信	44	4.9
通話	35	3.9
画像	7	0.8
ボイスメッセージ	5	0.6
通話キャンセル	5	0.6
空白行	3	0.3
合計	907	100.0

- ① 「うん」「はい」「そう」などの応答詞
- ② 「お願いします」など、放課後遊びに行く際の許可、待ち合わせ依頼
- ③ 「ごめんなさい」「すみません」など、母親からの宿題に関する問いへの応答
- ④ 「何時」「今どこ」など待ち合わせに関する語彙

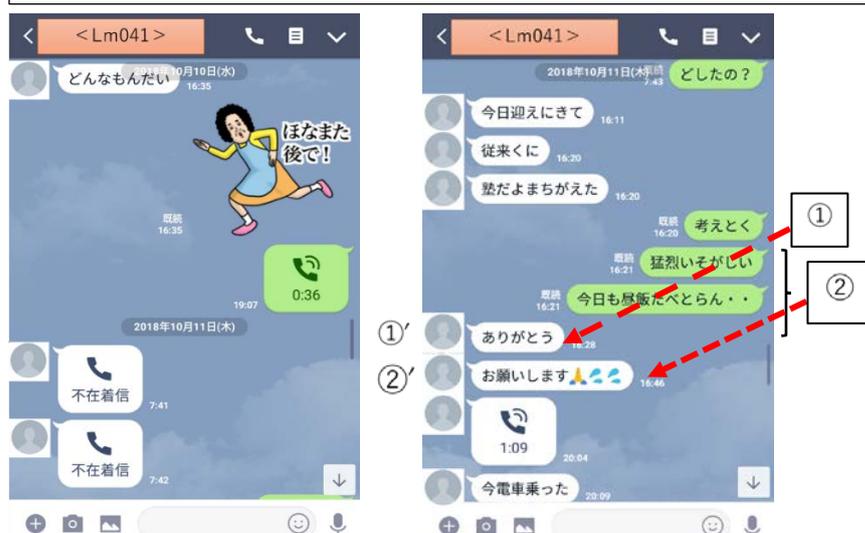
この長男には、1吹き出し内の文字列の読みやすさとしての「空白行」の挿入も見られた。このようなレイアウトの工夫は、小学1年生である弟のLINEには見られない。

このペアは、基本的に長男から発信があり、それに母親がメッセージを返信するというスタイルを取るが、話題進行の主導権は母親が持つ。実例は4.1.2以降に示す。また、即時返信をすることはなくとも、母親からの返信は必ず送られている。

#### 4. 1. 2長男のLINE例 <隣接ペアの作り方>

以下に母親 Rf008 と Lm041 とのトークルーム<<FM 4 1 0 0 1>>におけるやりとりの部分のテキストと、当該画像1<2018年10月11日>を示す。下線は筆者が挿入した。

2018/10/11(木)	<<FM 4 1 0 0 1>>
266	Rf008 16:20 <u>考えとく</u>
267	Rf008 16:21 猛烈いそがしい
268	Rf008 16:21 今日も昼飯たべとらん・・・
269	Lm041 16:28 <u>ありがとう</u>
270	Lm041 16:46 お願いします🙏🙏🙏



画像1 Lm041の画像例<2018年10月11日>

会話のように繰り返されるLINEの話者交替や呼応するその連鎖を、本稿では隣接ペ

アと呼ぶことにしたい。LINE における隣接ペアの作り方の特徴として、相手の送った吹き出しの順に隣接ペアをつくる、という傾向がみられる(画像 1)。具体的には (266) に対する隣接ペアが (269), (267,268) に対する隣接ペアが (270) となる。これは本稿で扱う対象者の次の若年層にあたる高校生以上のデータにもみられ、現在は成人の E メール返信の際にもみられる現象<sup>8</sup>である。母親も長男に対しては、同様の対応をしている。

相手の発信への呼応に時間差が生じて、相手のメッセージ送信の順を追って対応する応答を行う隣接ペアは、小学 1 年生の次男にはみられなかった。

#### 4. 1. 3 長男の感情を表す表現 —表層的文面と深層的感情—

次に母親 Rf008 と Lm041 とのトークルーム《FM 4 1 0 0 1》におけるやりとりの部分のテキストと、当該画像 2<2018 年 10 月 4 日>を示す。

LINE 履歴の一番左はトークルーム内通番を指し、次に管理 ID、発信時刻、その横に数字がある場合は、1 吹き出し内の改行数を表し、一番右は実際の文字列を示してある。スタンプには、文字列が付与されている場合のみ<>内にその内容を示した。下線は筆者が付与したものである。

2018/10/04(木)	《FM 4 1 0 0 1》			
102	Lm041	16:02		気持ち悪いしあたまもいたい
103	Rf008	16:02	1	どした
104	Rf008	16:02	2	頑張れ!
105	Rf008	16:02	3	母さんは今から会社じゃ
106	Rf008	16:03		なんかイヤなことあった?
107	Lm041	16:04		つらい
108	Rf008	16:08	1	なにが?
109	Rf008	16:08	2	勉強?
110	Rf008	16:08		<u>[スタンプ]</u> <甘えてもええんやで>
111	Lm041	16:16		迎えにきて
112	Rf008	16:16		夜?
113	Lm041	16:16		うん
114	Rf008	16:16		なるべく行けるように努力する!
115	Rf008	16:16		お父さんとも相談するね
116	Lm041	16:17		ヨロシクお願いします
117	Rf008	16:17		<u>[スタンプ]</u>
118	Lm041	16:18		<u>ありがとう</u>

上記抽出箇所は、スマートフォン端末を持つようになって 1 週間も経たないうちのトーク履歴である。これ以前の履歴には、長男と友人との遊びの連絡(互いの母親経由)の伝言、母との待ち合わせ、一緒に過ごす次男(Lm042)への伝言などであった。しかし、この前日から長男の通う塾への言及がなされるようになっていく。

10 月 4 日当日、トークルーム通番(102)に示した長男の体調不良の訴えが始まり、母親はその理由を尋ねる。これは、公衆電話から連絡をしていた際も、たまにみられたとの

<sup>8</sup> E メールにおいて、以前は引用符「>」を用い相手の送ったどの部分に対しての反応であるかが示されていたが、LINE の普及時期に伴い、20 代~40 代前半の世代の送る E メールには引用符が用いられる事が少なくなっている。筆者の確認したメールボックスの例では、2015 年に送られた 20 代女性からのメールが最初であった。

事であるが、母親の(110)「甘えてもええんやで」というスタンプの送信によって、一旦やり取りが中断される。その後長男は具体的な理由は述べないものの、(111)「(塾に)迎えにきて」と発信し、迎えの約束を取り付けると、気持ちは(118)「ありがとう」とおさまりをみせ、塾に向かう。

長男の不安はこれまでも対面時、つまり親子が一緒に過ごす朝か晩には表出されていたとのことである。しかし、端末を所持してからは、長男がスクールバスで帰宅し、塾に向かうまでの小1時間の休憩時間にも表出されるようになった。

LINEの文面に現れる表層的な不安は塾に対するものであったが、母親へのインタビューから、長男の学校生活の人間関係に対する不安が背景にあるという。塾の数が増え、少年野球チームとの両立のなか、長男は「迎えにきて」の一言の発信で、自身で次の行動を決め、塾も休まず通っているという。



画像2 Lm041の画像例<2018年10月4日>

#### 4. 2次男(Lm042)の場合

##### 4. 2. 1次男のメディア選択状況と内容(2018年9月30日~2019年5月5日)

送信当時小学1年生であった送信履歴は、グラフ2から、全体にLINEの利用頻度と時間帯に突出した傾向はみられなかった。

平日、休日に関わらず、次男が選択するメディアは、不在着信を含めると58%が音声(話す・聞く)による言語活動であった。

表3 次男によるメディア選択

	行	%
通話	43	30.9
不在着信	38	27.3
文字列	29	20.9
スタンプ	16	11.5
画像	12	8.6
ボイスメッセージ	1	0.7
合計	139	100.0

このデータからは、小学1年生にとって、文字を「打つ(書く)」活動よりも、「話す」活動が優先されていることがわかる。さらに、文字列以外に使用された、スタンプ、画像、ボイスメッセージを合わせてみると、「書く」以外の言語活動は約8割に及ぶ。

では、2割にとどまっている「打つ(書く)」活動の内容はどのようなものであったか。

具体的には「ごはんな～に?」「今日の朝ごはんな～に?」「きょうの夜ごはんな～に?」「おなかすいた～」「お母さんおいしかった～!」など、ほとんどが食事に関する語彙であった。その他、表 3 にある文字列によるメッセージの一部には、一緒に行動する事の多い長男による代替返信履歴も含まれる。

#### 4. 2. 2次男の送る文字メッセージ

以下に Lm042 とのトークルーム《FM40001》における食事に関するやりとりの部分のテキストと、当該画像 3 を示す。この箇所は特に文字列の使用の多い部分である。

データ全体を通して、次男発信の文字メッセージには、1 吹き出し内で改行を含むような長文は見られない。

以下図 3 に抽出した箇所は、日曜日であるため、母親は在宅している。母親の話では、次男の場合は、スマートフォン所有時から特に用事がなくとも、「とにかく電話をいじりたい」という理由で母親にメッセージを送るという。

2018年10月7日(日)《FM40001》			
84	Rf008	11:39	サンドイッチ
85	Lm042	11:42	[絵文字][文字スタンプS]やったー[文字スタンプE]
86	Rf008	11:42	おばあちゃんの分も作るからね。
87	Lm042	11:44	[スタンプ]
88	Lm042	11:48	おなかすいた～
89	Lm042	11:49	[スタンプ]
90	Rf008	12:28	できた!

端末所持から1週間の初めての週末、次男は同マンション内の同階に住む祖母の家において、これまでの日々のやり取りをなぞるように、「わざわざ」母親に LINE を送り、昼ごはんの準備を口実にメッセージを送っている。

抽出テキストの(85)に示した「やったー」の「顔文字」や「文字スタンプ」を使用し表現される「打つ(書く)」行為は、文字列の少ない中でも4例ほどみられた。一見、大人にとっては面倒であるこの「文字スタンプ」の使用も、児童にとっては一文字一文字をよく注視しながら選択し、打つ行為とも考えられる。

ただ、その後の母親からのメッセージに対する隣接ペアをみると、(86)「おばあちゃんの分も作るからね」の問いかけに対する反応ではなく、自身のお腹がすいた状況のみが述べられ、次の通話履歴まで3時間ほど経過しているところから、話題の継続は(90)までと推察できる。



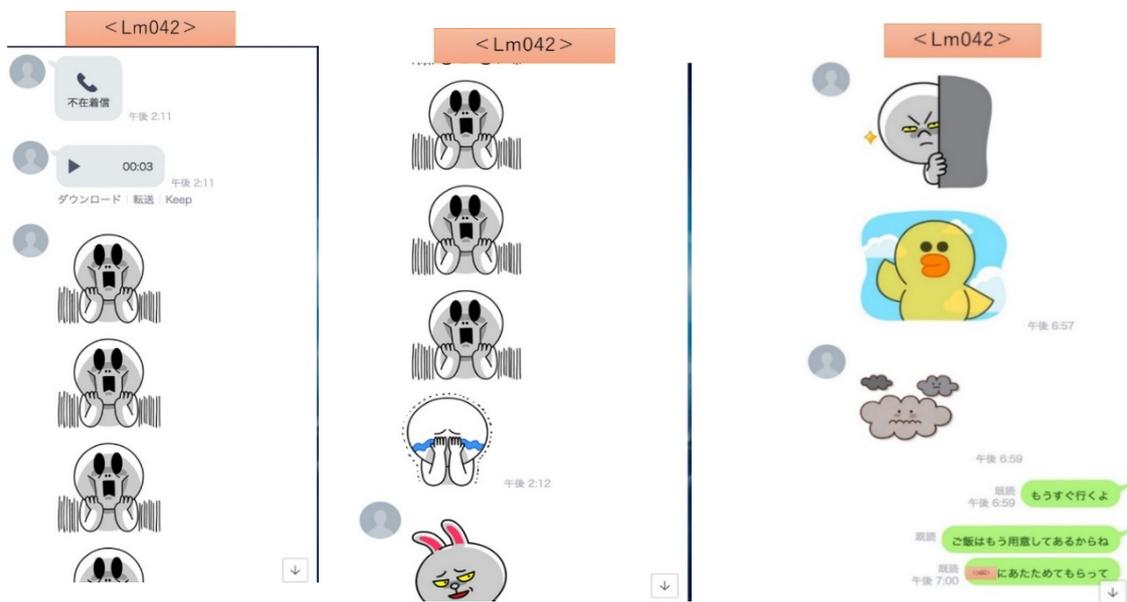
画像 3 Lm042 の画像例<2018年10月7日>

#### 4. 2. 3次男の感情表現

次男の「打つ(書く)」活動で使われる語彙の中で、食事に関するもの以外の感情の表出とみられる表現は、上記の「やったー」以外はみられなかった。児童にとって、感情は「話す」事で表現する事ができていたとしても、本データ中約3割を占める「通話(話す)」、もしくは約2割の「話そうとした(不在着信)」内容を、現時点で精査する事はできない。

そこで、文字列の次に発信される事の多かった「スタンプ」に着目する。

食事に関する場面以外に送られたスタンプ例を画像 4, 5 に示し、これらは 112~127 のようにテキスト化される。



画像 4 Lm042 の画像例<2018 年 10 月 4 日>

画像 5 Lm042 の画像例<11 月 12 日>

2018 年 10 月 4 日 (日)	《FM 4 0 0 0 1》
112	Rf008 13:39 ☎ 0:49
113	Lm042 13:41 ☎ 不在着信
114	Lm042 13:42 ☎ 0:56
115	Rf008 13:45 ☎ 2:40
116	Lm042 14:11 ☎ 不在着信
117	Lm042 14:11 [音声入力]
118	Lm042 14:12 [スタンプ]
119	Lm042 14:12 [スタンプ]
120	Lm042 14:12 [スタンプ]
121	Lm042 14:12 [スタンプ]
122	Lm042 14:12 [スタンプ]
123	Lm042 14:12 [スタンプ]
124	Lm042 14:12 [スタンプ]
125	Lm042 14:13 [スタンプ]
126	Lm042 14:42 ☎ 不在着信
127	Lm042 14:45 ☎ 1:32

画像 4<11 月 4 日 (日)>にあたる部分は、画像 3 場合と同様、日曜日のお昼過ぎの送信である。当該児童の選択できるスタンプは、初期設定のものだけであり、これらには一部英語が付与されたもの以外、文字列は付与されていない。

したがって、児童が文字列の付与されたスタンプからそのメッセージを「読み」、自分の感情に合わせて送る、という手順は踏むことができない。児童は、絵のイメージからのみ、これらを選択し、送信している。

スタンプ送信の傾向として、母親への通話がかなわないと(116)、スタンプが連続して打たれ(118-125)、(127)のように通話が可能になると、それ以降その日にメッセージが送られる事はない。

前頁画像5は次の130~137のようにテキスト化される。

2018年11月12日(月) 《FM40001》			
130	Lm042	18:56	☎ 0:43
131	Lm042	18:57	[スタンプ]
132	Lm042	18:57	[スタンプ]
133	Lm042	18:59	[スタンプ]
134	Rf008	18:59	もうすぐ行くよ
135	Rf008	19:00	ご飯はもう用意してあるからね
136	Rf008	19:00	<Lm041>にあたためてもらって
137	Rf008	19:08	ご飯おいしかった？

画像5に該当するテキストは、週明け月曜日の送信履歴である。次男が学童保育から帰った時間に送られているが、通話の後すぐ母親の様子を伺うスタンプが送信され、今にも泣きそうな表情をした雲のスタンプが送信されている。通話終了からわずか2分程度の事である。

すぐに心配する母親からの送信があるが、おそらく3分前に通話した内容を繰り返すものであったろう。(136)の長男への指示の伝言の後、さらに10分弱の時間を置いて、(137)で母親が次男の様子を伺う発信があるが、応答のないままこの日の送信履歴は終わる。

#### 4. 2. 4 児童の言語活動能力とLINE

小学1年生の「読む」能力について、高橋(2000)には、「一年生の冬の調査では、ほとんどの子どもが特殊音節も含め、すべての平仮名を読めるようになっていたが、この時期でも読みを習得した時期によって習熟の程度には大きな違いがみられた。」とある。

本データ参加者である小学1年生次男の「読み」習得段階について、特に母親からの不安は聞かれなかった。しかし、LINEというメディア上では、単語を「読む」だけでなく、相手のメッセージの意味や意図を「読み取る」必要がある。小学1年生の段階では、「読み取り」、「受け止め」、隣接ペアを作るまでに呼応する段階には至っていない可能性も考えられるが、この発達の段階の判断には、今後の調査が必要である。

また、対人関係の調節や談話管理の観点から、児童のLINEにおける「あいづち」的要素に絞った考察や、「フィラー」の使用についても、観察し、考察していく必要がある。呼応関係に対する母親の認識については、次の4.2.5のような例にみられる。

#### 4. 2. 5 呼応の発達と母親の不安

こどもたちにとっての不安は、母親にとっても不安材料になり得る。特にまだ相手のメッセージに呼応する態度を習得していない可能性のある次男のLINEを通した反応は、返信の有無自体が母親にとっての不安ともなり、スマートフォンを持たせて間もない頃には、以下のようなやり取りがなされている。

画像6は端末を持たせて2週間経過したの頃のトーク履歴である。母親にとり、次男が、対面に比べてもことばの応答が不足していると感じるのか、(104)の18秒の通話に対し、母親が(107)「なんか話そうよ」と呼びかける場面もみられた。

2018年10月16日(火)		《FM40001》	
104	Lm042	15:31	☎ 0:18
105	Rf008	15:32	もしもし、
106	Rf008	15:32	だけ!?
107	Rf008	15:32	なんか話そうよ
108	Rf008	15:32	おばあちゃんちついたの?



画像6 Lm042の画像例<2018年10月16日>

しかし、このような母親の発信はこの1度だけであり、以後は時間の経過とともに、今起こっている緊張がどの程度のものであるか、母親も学習し、次男だけでなく、母親の不安も解消されていく様子がみてとれる。まずは、通話か、文字列によるメッセージによって次男の不安を受け止め、それをなだめ、母親の帰宅後の対面につなげているという。

## 5. おわりに

『月刊言語』(2000)第29巻第7号には、「子どものことばをどう育てるか いま、様々な障害を越えて」との特集が組まれている。その中で野田(2000)「間接コミュニケーション中毒の若者たち」というコラムが掲載されている。そこには次のような一節がある。

もっとも、携帯電話が青年の会話を空虚にしたわけではない。二十年ほど前から空虚な情報交換や情報確認が肉声や電話回線で飛びかっいて、その後一気に携帯電話が普及したのである。

このコラムが執筆されて以降、私たちはさらに二十年の歳月を、回線を通した肉声どころか文字だけのコミュニケーションに参加せざるを得ない対人関係に向き合ってきた。筆者は携帯メールが全盛であった頃からそのデータ収集を行ってきた。その理由は、次々と新しく普及するメディアに対する目新しさというよりも、新たに必要となる相手を慮る事とはどのような事なのか、語用論的な表現はどう実現されていくのか、従来からの配慮や思いやりは新しいメディアではどのように表現されるのか、その伝達実現の難しさゆえ、探究を続けてきたように思う。目まぐるしく移り変わる伝達メディアは、人々の欲求によって受け入れられ、変化し、時には忘却されていく。そこには「楽しい」だけではない、人々の苦慮の積み重ねが垣間見られる。

今回データを提供していただき、貴重な時間を割いてインタビューに協力してくださった母親は「息子がメッセージを読むまでに時間が経つ。その間に相手の心理的状况にも変化がみられるが、何より自身の感情も“考えて”発信できるので、勢いに任せて怒る事は少なくなった」と話してくれた。さらに特筆すべきは、「<甘えてもいいんやで>というような発言はこれまで(端末所持以前)あったか」という筆者の問いに、「あ、それはなかったですね」と答えていた点である。

メールの普及で、時間軸以外の非言語的要素の伝え会えないメディア環境の中、それを少しでも補おうとする文字記号を駆使した新しい感情表現が発生したように、私たちは足

りない何かを補う方法を必ず探す。

自他の非言語情報が伝達されないその環境に「気軽さ」を見出す者も少なくない。個人によっては、むしろ自身の感情を表出させやすい環境として存在する。自分の感情や相手の感情を、日々の何気ない文字や絵、画像や動画の記録として反芻する環境が生まれ、自身の感情に気づく事もあるだろう。

今回対象とした LINE データは、あくまで対面コミュニケーションの補助的役割を果たすものであるが、記録されることから、自らの言語行動や「自他の感情」を見つめ直すことも可能であり、関係を成熟させていく事に少なからず寄与するものと考えられる。

### 謝 辞

本研究は国立国語研究所共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」(代表：小磯花絵), JSPS 科研費 16K02714 (代表：宮寄由美) の助成を受けたものである。

### 文 献

- 岡本能里子(2016)「雑談のビジュアルコミュニケーションーLINE チャットの分析を通して」  
村田和代・井出里咲子『雑談の美学』 pp.213-236,ひつじ書房
- 落合哉人 (2017)「電子媒体における「フィルター」」『筑波日本語研究』第二十二号 筑波大学人文社会科学部日本語学研究室 2017
- 加藤安彦(2007)「ケータイメールにおける顔文字と記号の出現頻度とその関係ーケータイメールコーパスの紹介とともにー」『専修国文』81巻, pp.1-17, 専修大学日本語日本文学会
- 長崎勉 (2000)「心の発達とコミュニケーション力-「信ずること・欲すること」の理解の発達と援助」『月刊言語』第29巻第7号 pp.58-64
- 野田正彰 (2000)「間接コミュニケーション中毒の若者たち」『月刊言語』第29巻第7号 pp.30-31
- 三宅和子(2018)「LINE 中の「方言」ー場と関係性を熟成する言語資源ー」小林隆編『コミュニケーションの方言学』第14章 pp.319-337, ひつじ書房
- 宮寄由美(2004)『場面における言語行動のストラテジーの考察ー携帯メールを中心にー』  
東京都立大学人文科学研究科国文学専攻修士論文
- 宮寄由美(2015)「LINE を用いた依頼場面における送受信者の言語行動ー表現の担う機能と構造に着目して」西尾純二他編『言語メディアと日本語生活の研究』 pp.5-20,大阪府立大学人間社会学部/大学院人間社会学研究科
- 宮寄由美(2017)「LINE を使用した依頼：2者間・3者間での受け手のフォローと共話性」  
第21回「ひと・ことばフォーラムーSNS の教育・研究の可能性についてー」ひと・ことば研究会
- 宮寄由美(2018)「LINE データベースの設計と属性付与の現状について」言語資源活用ワークショップ 2018 国立国語研究所 <http://doi.org/10.15084/00001651>
- 宮寄由美(2019)「流動する属性と関係性：『M-ZAK LINE データベース』からの報告」シンポジウム『日常会話コーパスIV』国立国語研究所
- 水谷信子(2001)「あいづちとポーズの心理学」『言語』第30巻第7号 pp.47-51,大修館書

総務省『平成29年度版 情報通信白書』

<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/html/nc111110.html>